

第14部会

総力戦体制下における信仰と戦争

——「日本基督教」を中心に——

川口 葉子

本発表は、アジア・太平洋戦争下における日本のプロテスタント・キリスト教において、「日本基督教」として現れたキリスト教の一形態について報告する。

二〇〇九年、日本プロテスタント宣教一五〇周年を迎え、七月に横浜で記念大会が開催された。「キリストにあつてひとつ——主イエスの証し人として——」というテーマのもと、日本キリスト教協議会（伝統派）、日本福音同盟（福音派）、日本リバイバル同盟（聖霊派）の三団体が協力して開催された。そこでは、一五〇年前の先人に感謝をするとともに、閉塞感のなかで福音宣教への使命を新たにすることを宣言した。一五〇周年とは、キリスト教界にとって、一致のあらわれであり、宣教の使命を再確認・再決起するものであった。

現在の「閉塞感」へと至る一五〇年の歴史の中で、戦時下のキリスト教は、外部とのかかわりが多いことが特異である。本発表では、そのかわりあいから創出された日本基督教に焦点をあて、それが教団の統制に重要な意味をもったことを明らかにする。

総力戦体制下において、宗教団体法を契機とした日本基督教団としての合同は、教団に所属する教師・信徒の信仰を掌握する意を内包するものであった。教団上層部は合同してひとつと

なったことに価値を置き、さらに信仰もひとつとすることを模索し、日本基督教を提唱した。

教団は教師・信徒に対し、日本基督教をありうべき信仰として提示した。それは、戦争という社会的文脈を契機として提唱された、国体との整合性をはかるための内的論理であり、そのキリスト教的純粋性、回帰性がうたわれ、時代状況を超えた日本におけるキリスト教の見直しであることが志向された。そして、教団や文部省によって開催された教師錬成会などを通して日本基督教の信仰が受け入れられるにつれ、上層部、文部省にとって信徒の掌握が容易となつていったのである。日本基督教によって、教団として総力戦体制に組み込まれていったといえるだろう。

しかし、終戦によつて社会状況が変わると、日本基督教が時代状況的な制約を受けていたことが明らかとなり、すぐに消えていった。個人主義的性格を帯びた日本のキリスト教の歴史の中で、日本基督教は異質なものであり、国家及び社会的状況の制約のなかで現われた一つのキリスト教の形態であった。

日本の新宗教における国家観・天皇観と実践

——解脱会の事例から——

塚田 穂高

日本の新宗教において、ナショナリズムがどのような論理構造のもとに存在し、それに基いてどのような実践が行われている

るのか。この問題は、新宗教の思想と運動における個人救済と世界（普遍）救済の間に位置する「国家」の位相を問うものであり、宗教研究の領域においても、また戦後大衆運動史における「愛国」・「保守」思想を見る上でも、有効な視点と言えるだろう。こうした問題関心に基き、本報告では解脱会的事例研究を行う。

解脱会は、一九二九年に、岡野聖憲（一八八一—一九四八、尊称・解脱金剛尊者）によって創始された神仏混淆の新宗教である。本部は東京・新宿区荒木町、宗教的聖地は岡野の郷里・埼玉県北本市にある。会員は、公称一〇万七五五六人（〇七年）。後継者の岡野聖法（一九三九）・法主は、伊勢神宮評議員、日本会議代表委員、新日本宗教団体連合会理事長、日本宗教連盟理事長などを務めている（〇九年時点）。解脱会の先行研究としては、B・エアハート、宮家準編『伝統的宗教の再生』（八三年）という重厚な成果があるが、本報告では主に岡野聖憲（以下、岡野）の言行を焦点化し、その国家観・天皇観などを析出していきたい。

岡野の思想形成上重要なのは、代々名主の家に生まれながら、事業の失敗・借金・脱税などで家・父母に迷惑をかけたことに対する、「父母の恩に応えたい、家名に恥じない働きをしたい、故郷に錦を飾りたい」という強い思いである。そしてそれは、「家」「先祖」「家郷」の重視により、氏神・菩提寺（先祖供養）の重視、また皇室崇敬へと接続している。

こうした岡野の経験は、たとえば会員が日々唱える「勤行法則」のなかの「三綱五常報恩」で、「国土の大御恩」「父母の御

恩」「社会の御恩」を強調していることなどに反映されているだろう。また、岡野の愛郷心は単なる郷土愛に留まらず、民族性（ナショナリズム）の次元にまで止揚されている。ここには、自己滅却による心直しから、家庭・地域・国（そして世界）へと敷衍していく積み上げ型の救済観が看取できる。そのなかで、確かに岡野は戦前から人類（「五色人種」）救済・万霊供養・世界平和を説いているのだが、やはり「国家」「民族」の位相が強調されることにより、幾分この普遍的局面は後景化している。

次に、実践面に目を移すと、まずは一九四一年より毎年行われている「三聖地巡拝」が挙げられる。皇宗を祀る伊勢神宮、神武天皇を祀る橿原神宮、皇室の菩提寺・御寺泉涌寺を巡るもので、毎年千人超が参列する。「人類を代表して」「世界平和のため」とも説明されるが、その論理連環は幾分不明瞭である。このなかでも泉涌寺の持つ意味は特別である。戦前、民間と交流がなかった同寺の護持を志し団参が認められた岡野は、逝去後に境内への埋葬が許され、「解脱金剛宝塔」が建立された。現在、年法要・年祭が行われ会員物故者精霊も合祀されており、同寺は皇室の菩提寺であると同時に会祖が眠る地であるという二重の意味を帯びている。続いて重要なのは、北本の御霊地にある「大日本精神碑」（現・「太陽精神碑」）である。毎年建国記念の日に「建立記念祭」が行われる。戦前は「日本精神」の称揚が主眼だったが、戦後は「太陽精神」の顕彰という普遍的志向が付与されている。

最後に、岡野が終戦にいかに向かいあったかを見ておこう。

第14部会

岡野にとって戦争はアジア民族を解放する「聖戦」であった。日本は武力では負けたが、目的は果たせたとする。また皇室崇敬も変わらず、むしろ終戦を「日本精神」と皇室の徳の普遍化の契機と見ている。

以上から、解脱会のナショナリズムの特徴は、家郷（家と郷土）／氏神・菩提寺（先祖）重視が、「日本精神」に代表される民族性・国家称揚や皇室崇敬に滑らかに接続されている点にある。また、主に戦前を生き、「国家」「日本」の位相を強調した会祖の言行に多くを拠っているため、普遍的救済の局面が幾分稀釈化・抽象化している点を指摘できるだろう。

無縁遺骨と恨（はん）

——被徴用者等の遺骨調査から——

工藤 英勝

国家戦争・国策による死亡者をどのように遇するかということは、いつの時代でも、重要な政治課題である。

ここで言う「無縁遺骨」とは、東アジア出身の強制徴用者等の遺骨で、アジア・太平洋戦争後、さまざまな事情で引き取り手がないまま墓地や寺院に留め置かれたままになっている遺骨である。

欧米の連合国捕虜等の遺骨は、敗戦後数ヶ月で引渡しを完了している。中国人捕虜等の遺骨については、昭和二一（一九四六）年に外務省が調査を完了し、一九五〇年代から仏教界が中

心になって数次にわたり、判明した遺骨が本国へ返還されている。これらとは対照的に、日本の旧植民地とくに朝鮮出身で民間企業に徴用されていた死亡者については、東西冷戦構造や南北分断の狭間で、民間による返還の外は放置されてきた。

軍人・軍属以外の朝鮮出身者遺骨の調査と奉還が、政府間で約束されたのは、二〇〇四年十二月の日韓首脳会談で、小泉首相との盧武鉉大統領との間で、朝鮮半島出身の民間徴用者等の遺骨も含めて返還に向けて人道協力するという合意が交わされたことに始まる。

日本政府は二〇〇五年七月に全日本仏教会を通して、加盟教団へ「朝鮮半島出身の旧民間徴用者等の遺骨についての情報提供のお願い」という調査依頼をした。

曹洞宗では、二〇〇五年十一月から、人権問題とりわけ教団・僧侶の戦争責任と戦後責任の一環として無縁遺骨および真相究明についての調査を開始した。

曹洞宗では、今日現在、約一三〇カ寺から関連する情報が寄せられている。北海道から九州まで少なくとも二六道府県に分布する。すでに合祀・合葬されている遺骨も含め、約六五〇体の遺骨の所在が確認されている。決して少ない数ではないが、朝鮮本籍などの詳細な身元情報が判明しているケースはわずかに四七体に過ぎない。

遺骨問題の調査チームが実際に発見した遺骨には少なからず女性や、生後間もない子供の遺骨を確認している。必ずしも徴用や強制連行を受けた当事者だけではない人々の遺骨である。朝鮮出身の労務者の体験もさまざま。いわゆる強制連行、強